



Japan Animal Welfare Society

発行人:麻生 泰  
編集人:山下 陽子  
山口 千津子  
編集協力:平山 企画舎

すべての  
生きものに  
尊厳を

アルバート・シュヴァイツァー



発行 / 社団法人日本動物福祉協会 〒141-0031 東京都品川区西五反田 8-1-8 中村屋ビル内  
TEL (03) 5740-8856 FAX (03) 5496-0930 ホームページ <http://www.jaws.or.jp>

第 52 号 主な内容

- ◎作文コンテストのあゆみ  
青少年の命への感性と共感を育む … 1  
作文コンテスト優秀作紹介 …… 2  
カレンダー写真募集 …… 2
- ◎地方自治体の動物行政 …… 3-4  
(神戸市動物管理センター)
- 「動愛法」施行規則の抜粋 … 5-6
- 事務局から …… 7
- 会員大募集キャンペーン案内 … 7
- 「JAWS-VISA」カード  
会員大募集キャンペーン案内 … 7
- JAWS ジュニアコーナー …… 8



記念品を授与される  
常陸宮妃華子殿下

動物愛護作文コンテスト  
あゆみ

青少年の命への感性と共感を育む

昨年(2005年)11月26日、当協会名誉総裁常陸宮妃華子殿下御臨席の下、第46回動物愛護作文コンテスト表彰式が開催されました。全国から送られてきましたたくさんのお応募作品の中から、中学生の部・小学生の部において、それぞれ環境大臣賞(同時に社団法人動物福祉協会賞1等賞も受賞)各1名、社団法人動物福祉協会賞2等賞各10名、ヒルズのサイエンスダイエツト賞各1名が選ばれ、この日、晴れて表彰されました。御臨席の常陸宮妃華子殿下からは出席者一人ひとりにお言葉をいただき、お菓子をお手渡しいただきました。

46年の歩み

一口に46回といいますが、年1回の開催ですので、ほぼ半世紀にわたって連続と続いできたこととなります。戦後の復興に邁進しているころから、東京オリンピック、バブルに浮かれている時代、その後の低迷時代と様々な時代、社会情勢に直面しながらも、青少年の「いのち」への感性と共感を育み、思いやりのある人間を育て、「いのち」にやさしい社会を築き上げたいと続けてきたのです。

(社)日本動物福祉協会は昭和32年(1957年)に創設されたのですが、その創設の年に第1回動物愛護に関する作文コンテストが朝日新聞の協力のもと開催されました。いかに当協会が不幸な動物を救うことと共に、青少年の育成に重点を置いてきたかがわかります。

昭和33年には小学校児童による「動物愛」をテーマにした絵画、ポスター、彫刻、手工芸品の展示会が池袋の西武デパートを会場に当協会とユネスコ芸術教育リーグの共催、ジャパントアムズの後援で行われました。作文コンテストと同じくアートを通して子どもたちの間に命の大切さ、動物への愛を普及させたいと企画されました。この「動物愛」をテーマにしたアートの展示会はその後も数年続けられました。

当協会創設時は人手も少なく、理事自ら幾つもの役目をこなさなければならぬこともあり、第2回動物愛護に関する作文コンテストは読売少年少女新聞との共催で昭和35年の夏に、第3回はその2年後の昭和35年に開催されました。以降、現在に至るまで、毎年、動物愛護作文コンテストが開催されてまいりました(第16回からは読売少年少女新聞の廃刊に伴い、毎日学生新聞のご協力を得ております)。が、応募作品数も年々増加し、審査員の方々も新聞社の方、上野動物園園長、エッセイスト、当協会理事など多彩な顔ぶれで、内閣総理大臣官房長官賞をいただくようになってからは総理府の担当官、環境大臣賞をいただくようになってからは、環境省の担当官も審査に加わってくださっております。



賞状授与

時代と共に変わる  
子どもの目

第27回以降の入選作文しか現存しておりませんが、それ以前の作文の傾向はわかりませんが、ここ17・18年の作文を読みますと、社会環境の変化、経済状況の変化、情報・知識の普及、マスコミ等の影響が子どもたちの動物に対する意識・考え方に及ぼしているように思います。小学生の作文においては、基本的に、自分や身近な人の周りにいる動物と自分との関わりについて書かれていることが多く、家で共に暮らしている動物の世話や病気と自己家族、しっかり世話をしなかつた反省、たくさん温もりをもらった感謝、保護した動物のこと、親たちにも手伝わってもらいながら貰い手がしをしたこと、飼育係として学校飼育動物の世話をしていること、動物園の動物のこと、親の職業に関わる動物のこと、補助犬のこと、身近な野生動物のこと、等等ですが、10年ぐらい前までは、軒下でのツバメの子育てから巣立つていくまでのいろいろな出来事や観察、登校途中で衰弱したタヌキを保護し校長先生も一緒に世話をしたことがなど身近な野生動物にもバラエティーがあったのですが、最近では生活環境の中で自然に出会える野生動物の種類も少なくなつたようです。

また、ここ2年ほど続いて取り上げられた内容に、自分はリードをつけて公園を散歩させていたのに飼い主がオフリードで遊ばせていた犬に咬まれた、大人はルールを守ってほしいという大人の無責任さを指摘したものがありました。確かにこのことは今問題になっていることのひとつなのです。飼われている動物の種類も、犬・猫が中心であったのが、最近ではハムスターなどの小動物もよく登場するようになりまし。飼育スペースの問題だけでなくマンガの影響もあるのではと思います。集合住宅で動物を飼えない子どもたちからは、動物に関する読後感想文も届きます。小学生も高学年になりますと、動物に対する思いだけに終わらず、そこに、学校で学んだこと・親に教わったこと、マスコミ等で得た情報に基づいた自分の考えが入ることも増えてきます。中学生の作文においては身近な動物のことや自分の体験を書かれたものもありますが、「動物愛護」など、動物に関するテーマについての自分の考えやいろいろな意見や説を述べたものが多くなり、学んだことも、情報量も多くなっているように思います。特に、最近では、学校での環境教育が広まってきたようで、「環境」について書かれたものが目立ちます。マスコミで自然保護・野生動物の保護や、人間との軋轢等について取り上げられていることも情報源となっているようです。

全体を通して感じることは、親や、学校の先生、親戚の人・近所の人等の大人たちがしっかりと子どもたちに係わり、温かくそして時には厳しくサポートしていることが子どもたちの感性・共感を育んでいるということ。大人が無関心であつては人間も含めた生きとし生けるものを思いやる子どもは育たず、未来の命にやさしい社会は望めないように思います。

(山口千津子)